高等学校における生徒指導・教育相談に関する校内研修の活性化についての研究
－校内研修におけるスクールカウンセラーの活用－

長期研究員　永 瀬　雄 次

Ⅰ　研究の趣旨

平成24年度本教育センター研究紀要の「生徒指導・教育相談に関する校内研修の活性化についての研究」では，高等学校（以下，高校）における，実施時間確保の難しさや生徒指導・教育相談担当者（以下，担当者）の負担過多などの，生徒指導・教育相談に関する校内研修実施・運営上の課題を指摘している。併せて，改善のために幾つかの提言を述べている。その一つに，人的資源としてのスクールカウンセラー（以下，SC）の活用がある。

本研究では，高等学校における生徒指導・教育相談に関する校内研修の活性化においてSCを活用することの有効性の確認を行うとともに，SCの具体的な活用モデルを提示したい。

Ⅱ　研究の概要

1　研究仮説

生徒指導・教育相談に関する校内研修に，SCを各高校の現状及び各SCの特長に応じて活用すれば，現象面からだけでなく心理面からも生徒理解が深まり，かつ具体的な指導援助策を見いだすことができ，校内研修の活性化が段階的に図られるであろう。

2　研究協力校の現状とSCの特長

	研究協力校の現状	SCの特長
A高校（農業学科）	生徒指導部中心に教育相談体制が確立し，養護教諭が特別支援コーディネーターを務める。担当者の進行の下で，定期的に学年単位の事例報告会を実施し，SCが的確な指導助言を与えている。	臨床心理士で，担当3年目。通算4年間のSCとしてのキャリアを持っている。
B高校（普通科・商業学科）	厚生部に属する教育相談係と養護教諭とが中心となり，全職員の共通理解を第一とした活動を検討している。現在は担当者が生徒の事例研究に力を注ぎ，SCが積極的に情報を収集し，事例研究の指導助言にあたっている。	臨床心理士で，担当1年目。通算4年間のSCとしてのキャリアを持っている。
C高校（普通科系専門学科）	教育相談係は保健厚生部に属し，養護教諭が教育相談の中心を担当し，SCや担任との仲介を務めている。学校における生徒指導・教育相談の体制は整備段階であり，SCは主として生徒と保護者との相談業務に従事している。	心理学科の大学教授で，担当6年目。通算10年間のSCとしてのキャリアを持っている。

3　校内研修の実践内容とSCの活用形態

校内研修の実践内容は，各校共に，第１回は現在進行形の問題に関する事例研究を，第２回は人間関係づくりを目的とした，構成的グループエンカウンター等の予防的・開発的教育相談の演習を行うものとした。なお，筆者は担当者及びSCと実施上の調整にあたるとともに，必要に応じて進行者の役割を担当した。

⑴　**A高校**【第１回参加者18名，第２回参加者13名】

第１回　SCは以前から学年単位の生徒事例報告会に参加し，教職員にその存在を十分に認知されているため，進行役及び指導助言を担当した。

第２回　SCが進行役を務め，構成的グループエンカウンターのエクササイズ（各校共通）「ミラクルじゃんけん」「バースデーライン」「サイコロトーキング」「いいとこ四面鏡」を実施した。

⑵　**B高校**【第１回参加者25名，第２回参加者22名】

第１回　SCは担当１年目であり，対象生徒との直接的関わりもないため，担当者が進行を務め，SCは進行補助及び指導助言を担当した。

第２回　担当者が全体の進行，筆者がエクササイズの進行者を務め，SCは教職員と共に演習に参加し，最後に指導助言を行った。

⑶　**C高校**【第１回参加者７名，第２回参加者30名】

第１回　SCはこれまで生徒・保護者とのカウンセリングを主業務としており，教職員との交流が少なかったため，進行は筆者が担当者の補助を得ながら務め，SCは最終的な指導助言を担当した。

第２回　担当者間で全体及びエクササイズの進行を分担し，SCは教職員と共に演習に参加し，最後に指導助言を行った。

4　アンケートの実施と分析

⑴　「直後アンケート」の結果分析（５件法）

各校共に各回の校内研修終了直後に，教職員・担当者・SCを対象にした各校共通のアンケートを実施した（**図１**）。

5:あてはまる 4:ややあてはまる 3:どちらとも言えない 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない(わからない)			第1回	第2回
A高校	研修内容の理解	教職員	4.3	4.2
		担当者	4.9	4.5
		SC	4.0	4.0
	今後への実践意欲	教職員	4.7	4.6
		担当者	5.0	5.0
		SC	4.0	5.0
B高校	研修内容の理解	教職員	3.4	4.3
		担当者	4.5	5.0
		SC	3.5	4.0
	今後への実践意欲	教職員	4.2	4.7
		担当者	4.5	5.0
		SC	5.0	5.0
C高校	研修内容の理解	教職員	4.4	4.2
		担当者	4.4	4.0
		SC	5.0	4.0
	今後への実践意欲	教職員	5.0	4.4
		担当者	4.3	4.5
		SC	5.0	5.0

図１　研修内容の理解と今後への実践意欲

全体的に4.0以上の結果であり，研修内容の理解が図られ，今後への実践意欲も高まったことがうかがえる。なお，Ｂ高校の第１回の教職員とSCの評価が３点台であるのは，困難な事例であったことによるが，「解決に向けて一歩以上前進できた」という教職員の感想もあった。同事例については，以後も継続的に検討されている。

⑵ 「事後アンケート」の結果分析（５件法）

全２回の校内研修終了後，教職員には２回の研修を通じたSC活用における校内研修の活性化について，担当者には各回ごとの校内研修におけるSC活用の有効性について，それぞれアンケートを実施した（**図２**）。

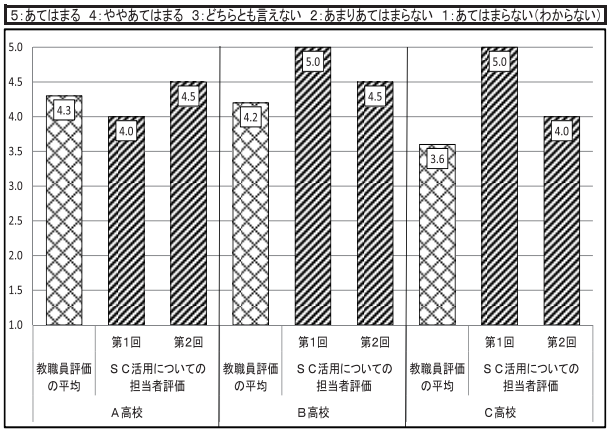

図２　SC活用に対する教職員・担当者の評価

全体的に4.0以上の結果を示し，校内研修におけるSC活用の有効性が確認された。なお，Ｃ高校教職員評価の平均値3.6は，SCの専門性が最も発揮された第１回の事例研究への参加人数がＡ高校，Ｂ高校に比べ少なかったことが理由として考えられる。

５　SCの具体的な活用モデルの提示

⑴ 学校の現状を考慮する

① 生徒指導・教育相談の支援体制が確立している場合は，担当者は補助にまわり，SCを校内研修全般の進行等，中核的立場で活用する。

② 校内の体制確立に努めている場合は，担当者とSCとが協力し合いながら，役割分担を行う。

⑵ SCの特長を考慮する

① SCの担当年数が長く，面談業務以外に教職員との関係性が成立している場合は，事例研究のほかにも，集団づくりを目的としたグループワーク等の演習進行役にあたってもらう。

② SCの担当年数が少なく，面談業務を主としている場合は，主に事例研究の指導助言にあたってもらう。

⑶ 研修内容を考慮する

① 予防的・開発的な内容に重点を置く場合は，集団づくり等を中心とした校内研修を実施する。

② 問題解決的な内容に重点を置く場合は，事例研究を中心とした校内研修を実施する。

Ⅲ　研究のまとめ

１　研究の成果

学校の現状及びSCの特長に応じてSCを活用することにより，心理面からの生徒理解が深まり，具体的な指導援助策の検討もなされ，参加者の実践意欲が高まり，各部会でケース会議が開かれるなど，校内研修が段階的な形で活性化されたことが確認された。併せて，校内研修におけるSCの具体的な活用モデルを提示することができた。

２　今後の課題

SCのさらなる有効活用を図るためには，学校の現状とSCの特長をさらに詳細に分析するとともに，より実効的な研修内容についても検討していく必要がある。

＊　各アンケートの内容項目及び構成的グループエンカウンターの演習資料は，教育センターWebサイト（http://www.center.fks.ed.jp/）を参照